

とうきょうはる おおのけいぞう  
東京の春（大野恵造）

咳く われは 朽木 桜よ いささかの

のぞみ  
希望に 生きて 今日も また

き  
聞くは 上野の 花 便り

啄木作の短歌

きみ  
君に 似し

すがた まち み  
姿を 街に 見る ときの

こころおど  
心躍りを あわれと 思え

むね  
胸の 空洞を 打ち たたき

うれい  
憂しや 見果てぬ 美夢 の

あと  
後 追う われは

あと  
後 追う われは 啄木鳥 か

解説 大野恵造作「啄木の四季」の一節。

北海道を点々とした啄木は、明治四十一年五月に上京しました。翌年六月に妻・子・母を上野駅に迎え、本郷区弓町の床屋（喜之床）の二階六畳二間の間借り生活が始まります。この時代に、啄木は小説や大量の歌を創作しましたが、日常生活は不規則で、不眠の結果として朝食抜きになり、エネルギー源の補給が減少していたのにもかかわらず、徹夜同然で大量作歌を繰り返していました。悲壮感、頭痛、不眠、妄想に悩まされ、二カ月後には、うつ病の症状が現れ、自殺願望を抱くようになります。そして、ある日未払いの下宿料を催促され、払わなければすぐ出て行くよう言われたのを苦にして、発作的に自殺を図りました。その後、明治四十五年啄木は二十六才という若さで亡くなります。死因は肺結核とされており、すが、貧しさゆえに極度の粗食を強いられ、それによる栄養失調が症状を悪化させることになったようです。

語釈 ※朽木桜Ⅱ朽ちた桜の木。桜の古木。  
※空洞Ⅱ心が虚脱状態であること。むなし  
いこと。また、そのさま。※見果てぬ美夢  
Ⅱ最後まで見終わらない夢。※啄木鳥Ⅱ「啄木」という名前は、療養中に、窓の外から聞こえてくる啄木鳥の木を叩く音に心を慰められたことに由来します。

通釈 咳をする自分は朽木桜のようになり望みを託して今日も上野の花便りを聞き、上野公園に行く。

短歌 上野公園で愛しいあなた（橘智恵子のこと）とよく似た姿の女性を街角で見かけた時、私は心が踊るように嬉しく感じた。そんな私のことを、あなたは可哀想と思ってくれるのでしょうか。

通釈 心の空洞を打ちたたきながら、最後まで見終わらない夢を抱き、君に似た人の後を追う自分は、啄木鳥と同じなのだろうか。（啄木鳥は鋭いつめを持ち、樹幹に垂直に止まることが出来る鳥で樹木をつついて穴をあけ、中にいる昆虫を食べる。）